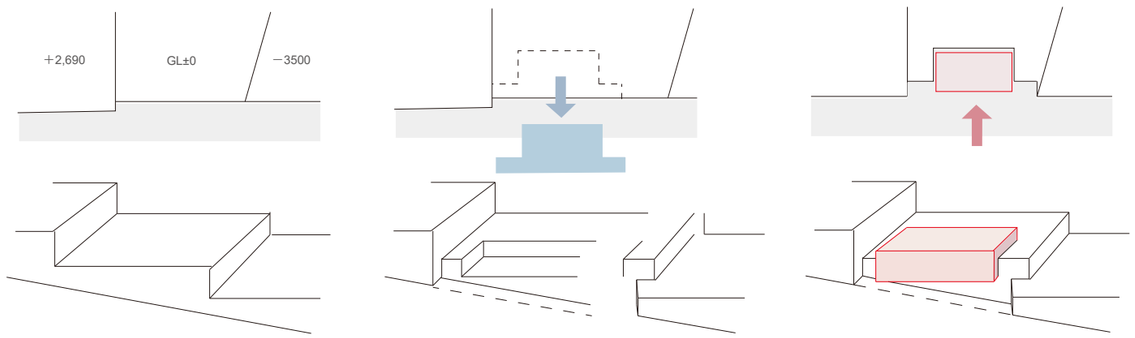
ANALYSIS

当該敷地は山の中腹にあり、急勾配の道路に接する。建築しやすい平坦部は前面道路より4mを超える高さがあり、道路からの長い階段アプローチのストレスが憂慮された。
本計画では、前面道路に沿ってガレージ部分の地山を掘削し、そのすぐ上部をGuest棟として据え、家人をできるだけ早く建物内に引き入れることを考えた。それにより生じる緩やかなシークエンスは自然な動線を保ちながらドラマチックにシーンが展開し、設計の要となっている。



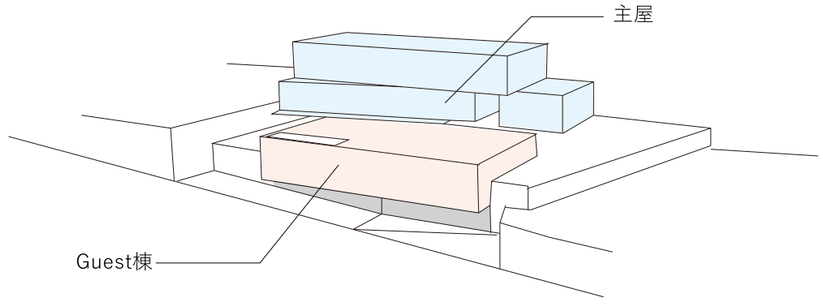
1 急勾配の道路に接する敷地

2 前面道路に沿って
ガレージ部分の地山を掘削

3 上部をGuest棟として据える

MA - 間合 -

人と人、モノとモノなど、二つのものを結びつける際には適度な距離が存在する。単に物理的な距離だけでなく、自然との距離や精神的な距離を含んだ物を間合いと呼び、それは茶の湯における心遣いの文化を形成してきた。
本計画ではGuest 棟のピロティやLibrary 前の Courtyardなど各室が自然と緩やかに繋がり、程よい自然の恩恵を受けられるよう配慮している。
また、緩やかな空間の連続は暮らしのシーンに合わせて、各人の程よい距離感を演出するよう計画した。



・人と過ごす時間を大切にしている
・家族との対話、食事の時間を大切にしている
・茶、座禅への造詣が深い
・家族以外にも客人やヘルパーにも厚情的
・庭や植栽を好まないのはメンテナンスの暇がないからであり、自然は好きである。
よって、家族・客人との居心地の良い距離感を住まい手が選び取れるプランニングが重要と考える。また、メンテナンスの対象として庭を捉えるのではなく庭のように屋外と結びつく場所を設け、見晴らしや通風、光を建物内に取り込む工夫が求められると分析した。